世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

プロティノスの時間概念とベルクソンに見るその継承について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 博和 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/186

プロティノスの時間概念とベルクソンに見るその継承について

小林　博和

1.　はじめに

ベルクソンについては、「ハイデガーやフッサールと並んで、二十世紀を代表する哲学者として挙げてもこれに異を唱える人は少ないであろうし、かつこの三人には時間とは何かを問い直した哲学者である」[1] と、述べられていることに、まさしく、異を唱える者は少ないであろう。

ベルクソンの哲学が、現代を古代と結びつけるものではないかと期待される点にも注目すべきであり、特にベルクソンとプロティノスの間の親和性については、興味深い考察対象である。「ベルクソンは時間を持続として捉える。持続こそは、生命とならんで、ベルクソン哲学のもっとも重要な概念であり、彼の全哲学を貫流している」[1] とあり、時間を持続として捉える、という考え方は直ちにプロティノスを想起させるのである。また、「…プロティノスは、プレイエによれば、ベルクソンが過去の哲学者のうちで類縁性を感じていた、まれな哲学者である」[1] とも述べられており、プロティノスの時間に関する考え方が、そのままではないにしても、何らかの形でベルクソンに流れ込んでいることを否定することはできないであろう。

それゆえに、ベルクソンとプロティノスの時間に関する論述を比較・対照することで、古代から近現代に至る、哲学における時間概念のあらすじが得られるのではないだろうか。

そして、仮にベルクソンとその流れをくむ現代の哲学者の時間に対する考え方が、プロティノスと懸絶していないならば、すなわち、ガリレオに始まると考えられる時間に対する科学的考察に、必ずしも同調するものではないのならば、現代の哲学者は科学的視点による時間感覚[2] とは別の時間感覚を持つという可能性があるのではないか。本稿は、ベルクソンとプロティノスの議論との異同を比較検証しながら、その時間概念を探ろうとするものである。

なお、ここでは、ベルクソンの時代およびそれ以降の、時間に対する、ベルクソン以外の時間に係る議論には踏み込まない、例えば、ハイデガーのベルクソンに対する批判、「『存在と時間』において…『量的継起』としての『通俗的時間概念』を超えようとした点では彼は正しいが、しかしそれが『脱自』としての『時性』から発源することを示さずに、それを『空間』と同一視した点で誤っている、そのために『根源的時間』を正しく捉えることもできず…等々の批判を繰り広げている」[3] 等については、今後の検討対象とする。

2.　時間に対する考察におけるベルクソンの契機

ベルクソンは言う。「古代人の科学は静的である…けれども、近代科学は、ガリレイやケプラーの諸発見をめぐって構成され、それらの発見がただちに近代科学の模範になった…ガ

リレイの主要な発見は何であったか？それは、落下する物体の通過した空間と、この落下に要した時間とを、結びつける一つの法則であった…」（ベルクソン全集、第四章近代科学における生成、1965）。そしてまた、「近代科学は、わけても、時間を独立変数として考えようとする熱望によって、定義されるべきである」として、「けれども、この科学は、つねに諸瞬間を考察し、つねに潜在的な静止点を考察し…いいかえれば存在の動性そのものとしての実在的な時間は、ここでは、科学的認識の手をのがれる」（同）と述べて、ベルクソンは古代の時間認識は静的なもので、それから脱したと思われている近代科学が、空間を分節化することで時間との乖離を招き、動的なものをまるで映画の各コマのように看做すことで、結局はベルクソンの言う「動性」を取りこぼすことによって、静的な時間認識に戻ってしまったと言う。これらについて、順次、詳しくみてみよう。

2.1. ベルクソンのみたプロティノスの時間概念

ベルクソンはその講義録（ギリシャ哲学講義、2001）において、プロティノスの時間に関しての議論について、直接的な分析を加えたりしてはいない。ただし間接的に、その因果性の説明において、プロティノスの時間論に言及している。すなわち、「ただし因果性は、それが時間のなかでの発生であるか、それとも論理的で非時間的な因果性であるかに応じて、二つの形式をまというる…ところで、プロティノスにおける因果性はそのどちらでもない…原因は時間の外にあり、帰結は時間のなかにあるのだ…劣等で一般的な霊魂は時間そのものであるが、ヌースと一致する、より高等な霊魂はそのまさに永遠性によって定義される…原因はひとつで不可分的だが、帰結は多様性に他ならないと言わねばならない」（ベルクソン全集、第六章霊魂の発出と放射の原理、1965）と。

ベルクソンは古代科学において時間は静止的であると述べるのだが、プロティノスに即して言えば、そこから時間が発するとされる、世界の根源である一者は永遠であるゆえに、直知界において時間は静止的である、とされるのである。だが、後で述べるように、プロティノスの言う直知界から形相の流出する感覚的世界では、時間が一者から流出しているゆえに、我々を含む全てが動いている。従って、ベルクソンの言う静止的という言葉をもって、古代の哲学者、少なくともプロティノスが時間を全て静止的なものとみなしている、と考えるべきでもないのである。

とすれば、ベルクソンの言う「静止的」とは、単に動的ではないという以上の何かを示していると考えるべきであろう。

2.2. ベルクソンにおける時間概念

さてベルクソンによれば、古代の時間認識は静的なもので、それから脱したと思われている近代科学が、動的なものをまるで映画の各コマのように分節化していると言う。この分節化により、結局はベルクソンの言う「動性」を取りこぼすことによって、近代科学における時間認識は、静的なそれに戻ってしまったと言うのであるが、それは、どのような論考によって導かれたものであるか。ベルクソンは時間を説明するために、時間と空間の両方を同時に取り扱う、ゼノンのパラドックスを例として考察する。またその引用の頻度は高く、ベ

ルクソンがこのパラドックスを如何に重要視しているかを知ることができる。

2.3.　ベルクソンの持続と運動

ベルクソンの近代科学への理解について、あるいはその深さについて、ここで考察するものではないが、ベルクソンの活躍した時期と、映画の発明と普及[4]が同時代であること、また、ベルクソンによる映画の仕組みの理解と、これを通じた近代科学に対する理解は、彼の時間に対する考察に強い影響を与えていることは疑いようがない。

例えば、「創造的進化」（ベルクソン全集、第四章の生成と形態、1965）において、ベルクソンは彼の見たであろう映像場面を、それは、ある連隊の分列行進を映したものであったのだが、これを例として、言うのである。「…それは、通り過ぎる連隊について、一連のスナップ写真を撮影し、ついでそれらの写真がつぎからつぎへと迅速に入れかわるように、スクリーンのうえに投影する方法である。これは映画のやりかたである。…われわれの日常的認識のメカニズムは映画的な性質のものである」と。

ここでベルクソンは、われわれの映画的認識は、「精神がわれとわが身を眩暈のなかにひきずりこみ、ついには動性の幻影に耽るにいたっても、かかる操作によっては、精神は一歩も前進したことにならない」と述べて、仮令映画フィルムとフイルムの間をさらに調密にしようと、ベルクソンの言うところの「動性」を決して満たすことはできないことを主張するのである。

ベルクソンは言う「これらの継起的状態を外から眺め、しかもそれらをもはや潜勢的な不動状態としてではなく、実在的な不動状態と考えるならば、諸君は決して運動を再構成することができないであろう…運動は合い間のなかに滑り落ちるであろう。というのも、諸状態をもって運動を再構成しようとするあらゆる試みのうちには、運動はもろもろの不動からできているというこの不条理な命題が含まれているからである」。ベルクソンの言説は、われわれの認識が映画的なものである、即ち、映画のフィルムとは各コマにより構成されているように、そこに時間の分節化が起きているゆえに、運動を捉えることができないことを主張する。これは、時間と空間についての、ゼノンのパラドックスを、ベルクソンが如何に捉えたかから逆に展開した方が理解しやすい。

2.4.　ベルクソンから見たゼノンのパラドックス

ベルクソンは、時間に対する自己の認識を説明するために、ゼノンのパラドックスを用いる。ゼノンのパラドックスには、いくつかのバリエーションがあるが、基本的には同じ論理構造を持つ[5]。ベルクソンはそのバリエーション、飛ぶ矢（ベルクソン全集、思考の映画的メカニズムと機械論的錯覚、ゼノンの論証、1965）、アキレスと亀（ベルクソン全集、エレア学派の錯覚、持続の概念、1965）、二分法（ベルクソン全集、変化の知覚、変化と運動との不可分性、1965）のそれぞれについて、何度も言及する。例えば、アキレスと亀について、以下のように。

「…なぜなら二つの点を分っている間隔は無限に分割可能であり、それでもしも運動が間隔そのものの部分のような諸部分から構成されているのであれば、その間隔は決して越えら

れることはないだろうからである」（ベルクソン全集、エレア学派の錯覚、持続の概念、1965）として、ある運動の間隔に係る前提が真であれば、ゼノンのパラドックスはパラドックスのままであるけれども、「しかし事実は、アキレスの歩みの一つ一つが単一で不可分の行為であり、このような行為を必要な数だけ行なった後では、アキレスは亀を追いこしてしまうだろう」（同）として、エレア学派の錯誤つまり、「…彼らがこの不可分で独自の一連の行為をその下に横たわっている等質の空間と同一視することから由来する」（同）が、パラドックスの所以であるとベルクソンは主張する。すなわち、「それではどうしてアキレスは事実亀を追いこせるのか。それはアキレスの一歩一歩、亀の一歩一歩が、運動たるかぎり不可分のものであり、空間たるかぎりでは異なる大きさだからである」と、ベルクソンの云う「動性」を考えることによってパラドックスは解消すると言うのである。

つまり、ゼノンのパラドックスの論証により与えられる、我々の常識と相反するような帰結は、エレア学派の運動と空間を同一視する、という認識によるものであって、ベルクソンの言うように「運動は持続の中にあり持続は空間の外にある…」（同）を真と考えるのであれば、論証は常識的な結果にいたり、そこにパラドックスは存在しないと言うのである。

かつ、時間と空間の関係について、ケプラーとガリレオに始まる近代科学は、天文学における惑星位置の決定に大きな進歩のあったことが始まりであることを述べてから、「こうして数学は、ある瞬間におけるアキレスと亀との同時的位置を決定しようとつとめているかぎり、あるいは、一点Xにおける二つの運動体の出逢い、それ自体が同時性である出逢い、を先験的に認める場合、数学たるの役割のうちにとどまっている。しかし二つの同時性のあいだのへだたりの中で起こることを再構成しようと主張するとき、数学はこの役割をこえてしまう」（同）と述べることによって、「運動は空間の外にある」ゆえに近代科学にも限界があるとする。

ただし、何ゆえに運動がそのようなものであるかについて、ベルクソンは「直接的な直観が、運動は持続の中にあり持続は空間の外にあることを示してくれるのに、空間や時間や運動の性質についていかに巧妙なものにせよ形而上学的仮説などをどうして援用する必要があろうか」（同）と断定するのである。

すなわち、ゼノンのパラドックスは、ある形而上学的仮定によって論証を進めると、経験的知識には反する結果に導かれるのであり、このパラドックスは、ベルクソンの言うように、運動が、空間の外にある持続の内にあると考えない限り解消できず、また、近代科学はエレア学派と同様に運動を空間と結びつけて分節化するゆえに、パラドックスに陥り、そこでは持続の内にある運動を把握できない、すなわち時間を静的に認識することと同じ結論を導くことになってしまい、結果として古代の時間認識に回帰してしまうとベルクソンは言うのである。

では、ベルクソンにおける時間あるいは運動の概念は、如何にして導かれたのであろうか。静的であるとされる古代の時間概念の後に、ガリレオによって開かれた近代科学にあって動的な時間概念へと発展したと思われる歴史は、なぜベルクソンによって、近代科学は静的な時間認識に回帰したと宣言されたのであろうか。

そこで、ベルクソンが近代哲学者のなかで最もプロティノスに親和性が高い、と言われた

関係を逆に辿って、一旦、ベルクソンから離れて、プロティノスが時間についてどのように考えていたかを述べる。その歴史的遡行を通じて、ベルクソンの時間認識の契機について考える。

3.　プロティノスにおける時間概念について

プロティノスはその著書エネアデス「永遠と時間について」（プロティノス全集、1987）において、時間を論ずる。プロティノスは問う、「時間の内にあることが、しかもまたどうして（同時に）永遠の内にあることができるか」と。永遠は人間にとって身体的認識の外にあるから、逆に容易に定義できるのであるが、人間が感覚する時間と永遠の関係については自明ではないのである。そこで、プロティノスはこれに続いて、両者の並立について、「その前に時間（とは何か）が発見されて初めて知られうるだろう」と述べるのである。それでは時間をプロティノスはどのように考えたのだろうか。

図１は、プロティノスの上述の「永遠と時間について」の記述を、マップに再構成したものである。図に示されるように、プロティノスは、「時間について述べられている諸説をおそらく三つに区分するのがよいだろう」として、挙げられたのが、

（1）時間は何らかの指定される動きであるのか

（2）時間は動くものであるのか

（3）時間は動きに関する何かであるのか

である。

（1）については、動きには開始と終息があって、そのどちらも時間という枠組みの中にあるので、時間そのものではない、（2）は天球の回転のようなものであるという主張であるが、天球の回転に早い部分と遅い部分があることから、これも時間ではない。天球のある部分の動く距離だという意見については、距離は時間ではなく場所であるという理由で却下される。（3）は、時間とはある特定の動きの数であるという考えである。だが、これも動きが無秩序なものであるなら数えることはできないし、すべての動きに共通な、数え得るものがなければならない。

ここからプロティノスは時間とは何かを測るものさしではないかという考えを提出する。プロティノスは言う「さてそこでまず、時間とは測られた動きで、しかも一定の量によって測られたものであるとすれば、ちょうど動きが［動きが測られねばならないばあいに］それ自身によってではなく、他者によって測られねばならぬように…とすると、動きと一緒に走る大きさがではなくて、動きに伴う大きさの数があの時間であるだろう」。そして導かれるのは、「しかしこの数は単子的（抽象的）な数以外の何であるだろうか」という仮定であり、「そして、これがどのようにして測るだろうか、と困惑するのは必然である」とする。

すなわち、プロティノスは、特定の何かを数えることが時間であるという考え方にまで至っていながら、「しかし、これは時間と同じものではない。なぜなら、時間を規定することと、ある量の時間を規定することとは別であるから」そして、「これだけあるものと言う前に、そのこれだけあるものが何であるかを言わねばならないのだから」というジレンマに

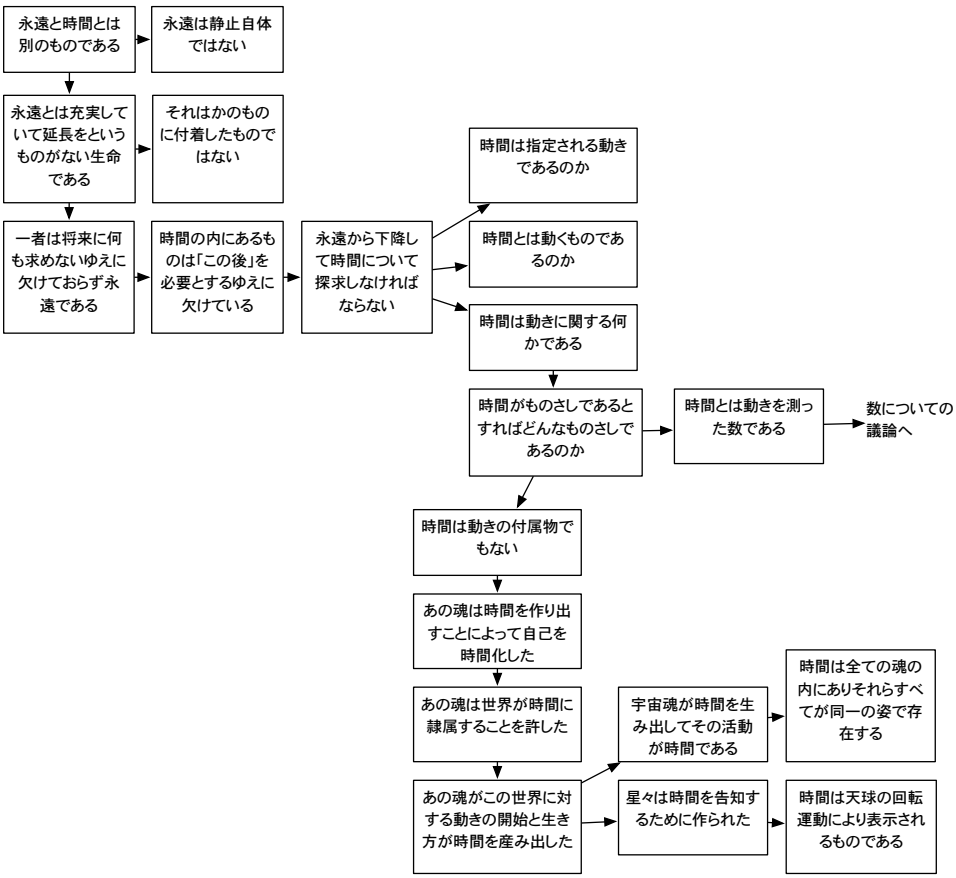

図１　プロティノスのエネアデス「永遠と時間について」III-7-(45) の構成のマップ
マッピングについては（小林、2014）によっている

陥る。時代はガリレオの生まれる前であり、振り子の等時性は見いだされておらず、そして「いやしかし、動きを動きの外部から測った数が時間なのだ。それは、馬を数えるばあいの十が、馬と一緒にではなく（単独に）考えられるのに似ている」と述べて、その数が個々の事物に付着したものではなく、「しかし、この数がどんな数であるかはまだ言われていない。それは十と同様に、測る以前でも、それがまさにそれであるものであるはずだが」と述べるのをみると、既にプロティノスは等時性に肉薄していると看做してもよいのではないか。

さらにプロティノスは、「いや時間は次のような数、すなわち（動きと）並走しながら、動きの〈より先〉と〈より後〉に基づいて（動きを）測った数である」と述べて、時間は瞬間そのものを測るのではなく、ある瞬間の先と後により測る、すなわち時間の長さについて言及して、点と長さを峻別していることが分る。

しかしながら、プロティノスは、確固たる秩序を保つ数えるべき対象物を発見できなかった故に、時間に対する考察はそこにとどまってしまうのである。そして、プロティノスは、この世すなわち感覚世界における時間の探求ではなくて、永遠についての考察から、時間を

観るという方法に立ち戻らざるを得ない。

プロティノスによれば、時間は「自分がそれ（以前あるいは永遠）とともにオン（有るもの）の内で安らっていた。そのときはまだ自分は時間ではなくて、かのものの内で自分自身も静かに安息していた」。ところが、「余計なことの好きな本性がいて、自らが支配したいと望み、独立していること、現にあるよりももっと多くのものを求めることを望んで、それ自身も動き出し、自分（時間）も動きだした」というのである。それゆえに、時間は「永遠」の似姿でもあると述べる。

とりまとめると、プロティノスは時間とは何かを考えるなかで、その一つとして、「時間とは動くものであるのか」という仮定を立てて論考する。そして、「時間は世界の動きの距離だというのであれば」、それは二つの仮定に分けられて、(a)「場所によって測られるだろう」とすれば「とすると、これはある距離であるだろう。そしてこの距離は、時間ではなくて場所である」ということになるので、(b)「その量は動きそのものが連続的であることと、すぐに停止しないでいつも継続することによって、距離をもつという意味であろう」と論を進め、「むしろ動きが次から次へと現れるだけである…それはたとえば水が次から次へと流れて来るようなもの、そしてその水の上に観られる延長のようなものである（のか）」と述べた後に、この立論が結果として不十分であることを示すのである。その後に、プロティノスの議論は永遠との関係および、「一」と数についての議論へと向かっていくのである。

4.　プロティノスとベルクソンの間にたつガリレオの等時性

このように、プロティノスは時間を、永遠つまり一者から考察した。では、現在の我々が認識している時間、それは等時性という言葉で表されるのであるが、その等時性とは何か、までに遡ってみよう。すると時間とは何かについて、現代に生きる我々が持つ知識と、時間に対する感覚とが完全に一致するかどうかについては、それが必ずしも自明ではないことが明らかになってくる。再考してみよう。まず、等時性に対する我々の理解はどのようなものであるのか。一般的に等時性といえば、

・振り子などの周期運動で、周期が振幅の大きさに無関係に一定であること。

・時間の間隔が一定で等しいこと。特に、周期運動の周期が振れ幅に無関係で一定な場合をいう、などと一般的には言われている。「時間の間隔が一定で等しいこと」は、単語の説明であって、意味的には等時性の同義反復である。すると、周期運動の周期が（a）振幅に無関係で、(b）一定である、という論に還元されるのであるが、まず（b）一定である、という記述は、周期が一定であることが等時性であることそのままであり、これも等時性の同義反復である。では、(a）振幅に無関係に、という論を考えると、これは最も普通には振り子の振幅を指しているのであるが、当然ながらこれは物理的には微小な振幅の時にのみ成り立つのであって、ガリレオ程の観察者であれば、周期が振幅に関係していることは直ぐに見抜いたことであろう。とすると、ガリレオが確信したのは一体、何であるかということになる。

最もありそうなのは、一日の長さが厳密に、振り子のような「物理的過程」により、「数えられる」ということではなかったか。ガリレオが等時性を発見した時、振り子の周期を自

分の脈拍と比較したというエピソードがあるというから、「数えられる」というのが、重要なキーワードであることに間違いはないだろう。

もちろん、プロティノスがガリレオに劣るわけではなく、このときガリレオが、望遠鏡を以て天体観測をしたという点が、決定的に重要な両者の違いであろうと考えられる。すなわち、望遠鏡は機械的に肉眼の能力を拡大するものであり、機械的なものを通じての認識が肉体のみによる認識と異なるものではない、という考え方をガリレオが持っていたのに対し、プロティノスの時代には、機械によって人間の感覚を拡大するという手段が、そもそも出現していなかった故に、プロティノスの「特定の動きの数であるとも考えられるが、動きとは無秩序なものであるから、時間は数えられない」という結論に至った点こそが、両者を分けたのであろうと考えられるのだ。

その結果、ガリレオにとって一日とは、機械的に振り子の周期で数えられるものであり、プロティノスにとっては、われわれの感覚する時間というのは曖昧なもので、絶対的で唯一の「永遠」の似姿である、という結論に至るのである。

従って、仮にプロティノスの云う、いわゆるネオプラトニズムが、キリスト教の論理に流れ込んでいるとすると、ガリレオの考え方が永遠を基本とするキリスト教会に受け入れられ難いのは、理解できるし、さらに、その後、ガリレオの考え方は果たして容認されたのかどうか、という問題が残っているのである。というより両者が共存することはあり得ないのであるから、ネオプラトニズムが根幹にあるとすれば、ガリレオの考え方は未だに許容されず、それがガリレオの立場にある者たちの、キリスト教に対する態度に影響を与えているのではないか、とも言えるのである。この点については別稿によって考察を試みたい。

4.1. 時間の等時性とその意味

さて、振子の「等時性」とは、振り子の振れ幅が小さい場合、その周期は重さや振幅に関係なく一定であり、振子の支点から錘までの距離と重力加速度により決定される、と一般的には定義されるのであるが、それは「時間」の「客観性」に容易に結びつくのである。すなわち、振り子の「等時性」とは、同じ加速度の場における同じ長さの振り子の周期は、地球上のみならず、全宇宙において同じであり、さらに過去においても未来においてもまた同じであるという性質であり、それは同時に我々の感覚する物理世界が、長さと質量と時間により記述されるという原理でもある。それはつまりプロティノスのいう人間の認識の「先にある」、つまり、人間が創出される以前から存在するものであり、また人間の存在の「後にも続く」ものでもある。

時間の客観性とは、人間の主体性とは無関係に存在するものである。なぜなら、物理学が示すように、世界が長さと質量と時間によって構成されている時、長さと質量が人間の意志と無関係であるように、時間も人間の意志とは無関係なものであるからである。同時に長さと質量と時間は世界（宇宙と呼び替えてもよいであろう）の要素すなわち、我々の認識する全てである世界の要素として有るのだから、時間だけを特別視することも不可能なのである。ただ我々は世界のなかに在って、長さと質量の組合せの時間による変化を眺めており、かつ眺め得る時間が限られているという制限、すなわち寿命を持つという認識によって、時

間を特別視するのに過ぎない。

しかし、振り子の等時性から考えて、長さと質量の組合せの変化として捉えられる時間は、何処にあってもその性質が変わらず、またその性質が先にあっても、後に続いても変わらないとすれば、時間に対する認識の仕方を現在に置いたとしても、先にも、後にも、現在と同じ認識の仕方が可能であろうと思うのは自然である。つまり星々の動きは現在も、先にも、後にも、変わらないであろうと推定されるのである。これが、星々の動きを予測できる所以であり、我々はこれを正確に行うことができることを知っている。だが、星々の動きが正確に予測できるのは、長さと質量で測られる星々が、星々の間の長さが極端に大きいゆえに、長さと質量の組合せとしては単純化されているからなのである。

4.2.　感覚世界が長さと質量の組合せにより作られていること

これに比べれば、われわれの活動する精細な世界は、長さと質量の組合せが極度に複雑である。それゆえに、星々の動きのようには予測できないのだ。しかしながら、組合せは複雑であるにしても、それは完全に乱雑ではないために、幾分かはその動きが予測できるのである。

さらに、幾分かは予測できるということは、予測が誤る場合もあるのであって、ここで最も重要であるのは、どのように工夫を重ねても、予測は先にいけばいく程、次第に誤りがちになるのである。すなわち、「確からしさ」は減少していくのである。なぜならば、予測は時間に関係していて、今から後、とされる時間が長くなるほどに、組合せは現在の組合せから異なってくる、すなわち存在し得る組合せの数は、増大すると考えられるからである。

現代の科学は、今から後の世界の組合せの内、実現するのは、可能であり得る多数の組合せのうちの一つであると見なすこととしている。これが確率である。つまり、今から後に実現するのは、因による果ではなくて、今の組合せに近い、ある組合せであろうと考えるのである。この考えに立って、今から後を考えるのが、オペレーションズ・リサーチであり、天気予報であり、リスクマネジメントであり、公衆衛生であるのである。

もし時間が因果の力によって川の水のように流れるのであれば、そこには現代の科学は存在し得ないのであり、それゆえに、今から後を考えるにあたって、科学を適用することは不適切であることになる。このように考えると、東日本大震災に遭遇して、そこに起きた多くの厄災、特に原子力発電所の事故のように、人間の感覚によって認識できない放射能の挙動に、哲学にその知的な範をとっていると推測される人々が、論理よりも感覚によって、あるいは科学に対する敬意ではなく侮蔑により相対した理由[6)]が次第に明らかとなってくるのである。

すなわち、今より先（過去）が、今に変化して実現したのは、その時に可能であった多くの組合せのうちの一つであるという認識ではなくて、実現した今は、ある因により決定的にもたらされた果であると思い込んだのである。もちろん因があったわけではないから、与えられた果を目にしてその矛盾に苦しんだのである。また、今より後が、今の状況の組合せから分岐変化したものとして存在するであろうということ、そして今より後とは無数とも言える組合せの可能性であって、どのような組合せも実現しうるとうい事実に直面して、不安を抱いたのである。なぜそれが不安であったかと言えば、すなわち、不安とは、論理により分

けられず光りにより照らされないものであり、不安に対して人は畏れ、そして侮蔑するものであるから。

仮に、ガリレオに始まる時間の等時性という考え方、およびそこから発展した科学的な時間に対する記述に、現代哲学者が、その論において賛意を含意していないとすれば、確かに、科学的時間発展をその根拠とする、リスクという考えに、実は哲学的に賛同していないのではないか、という疑義に至るのでる。

5. 今後の課題

以上のように、近代を代表する哲学者の一人と目されているベルクソンの時間に対する認識が、古代のプロティノスを直接に継承するものではないとしても、その立ち位置は、表面的には大きく変わるものではないことを述べた。いや、むしろ、ベルクソンが、現代における市民社会と科学技術が融合する時代において、科学技術の市民社会への影響を疑問視するがゆえに、その時間認識をプロティノスの時代と大きく異なるものとすることができなかった、とも言えるのではないのか。

近代から現代に続く哲学に、この性向あるいは形式が保たれているとすれば、それがどの程度に浸透あるいは拡散もしくは底流となっているかについて、さらに追求すべき問題となるであろう。なぜならば、現代の科学技術とその適用は、等しく時間概念に対して科学的な立場からこれを認識することを我々に求めているからであり、もしそれを否定するとすれば、確率的事象が危機として表れたとき、その認識は科学の導き与えるものと、大きく異なることであろう。それゆえに、現代に到る哲学者群における時間概念について、さらに吟味することは、現代社会を理解する上で重要な課題であるとも言えるのである。

註

1） ベルクソン読本　―いま、ベルクソンを読む、久米博、法政大学出版局、2006

2） 時間を含めて、人間の感覚をもって捉えることのできない事象について、科学者は事象の物理的あるいは統計的モデルを手がかりにして、モデルが表現する結果と観測結果とを比較することで、それを認識しようとする。

3） ベルクソン読本　―ベルクソンとフッサール、中敬夫、法政大学出版局、2006

4） リュミエール兄弟による映画の発明と、1895 年のパリ科学振興会における公開である。

5） ゼノンのパラドックスとは、例えば、「地点 A から地点 B に移動することを考える。このとき、A と B の間には中間点があってこれを B1 とすれば、B1 を通過した後、B1 と到達すべき点 B との中間点 B2 を通過しなければならない。同様にこのような中間点は無限に想定されるから、B に到達するためには無限の点を通過しなければならない。無限の点を通過するためには有限の時間でこれをなすことができない。従って B に到達することは不可能である」の如く、時間と空間の間に矛盾があることを主張するものである。

もちろん、このパラドックスは現実世界で生じることはない。現実世界に存在しないことが経験的に知られているような、パラドックスについて、それをどう解決するかについては、大きく

二通りの方法が考えられる。一つは提示された問題の論証の仕方が誤っていると考える立場であり、別の方法は、パラドックスそれ自体の提示が不適切であるとする立場である。

近代科学の経験は、ある事象を説明するために提示されたモデルの結果が、現実世界では観測されない場合、観測に「確からしさ」を導入した後、観測を繰り返すことで「確からしさ」を高めることによって、観測が誤っているのではなく、モデルが誤っているのではないかと考えることができるようになった。

すなわち、ゼノンのパラドックスは、現実世界の観測結果と一致しないゆえに、問題の記述に人間の誤謬を招くような陥穽が設けられていると考えられるのである。このパラドックスに仕掛けられた陥穽は、点と直線の関係に実際には観測できない無限という仮想的な視点を持ち込んだところにある。

つまり、ゼノンのパラドックスの言う「点」とは、位置を示す「印」であって、線上においては先と後を分けるものである。すなわち、「移動するには無限の点を通過しなければならず」ではなくて、「ある点を通過するとは、その点の先と点の後という二つのものが必要な、順序を持つ事象あって、それゆえ前と後の二つがあって、前と後が分かれているゆえにその二つの間には距離がある。つまり有限の長さの線が必要である」と解釈すべきなのである。それゆえ「無限に時間がかかる」のではなくて、「有限の距離は有限時間で通過される」のである。

したがって、ゼノンのパラドックスについて、それを人間の言語が人間の感覚的経験を基にしているが故に曖昧さを持つことを利用した、実際には存在しえない論証であると看做すべきである。同時に、(a) ゼノンの論証が存在し得ないことと、(b) 提示されたパラドックスは論証が不十分ゆえに結論の真と偽とを決定できないのではなくて、適切な説明を用いれば偽であるとできること、との間には、大きな違いが存在するのである。

つまり、提示されたパラドックスについて、適切な説明を用いればこれが偽であることを論証できると主張することは、そのパラドックスがパラドックスゆえに真と偽が判定できないと考えられてきた場合に、偽であるとするその論証が正当であることを支持するようにみえるのである。もちろん、パラドックスが実際には存在しない場合、パラドックスが偽であるとする論証もまた、根拠を失ってしまうのである。

近代科学においては、「確からしさ」を指標とした場合、パラドックスと見えても現実世界で観測により確認できないモデルは一般には棄却されるのであって、存在しえない前提条件の元で、論証を試みることは、プラグマティズムを排するためには有効であるものの、結局は矛盾を抱え込むこととなるのである。

6）「東日本大震災、現代思想　2011 年 5 月号、2011」に、その衝撃の覚めやらない時期における例が見られる。

参考文献

ベルクソン全集 1、4、7、平井啓之他訳、白水社、1965

ベルクソン講義録 IV ギリシャ哲学講義、合田正人他訳、法政大学出版局、2001

プロティノス全集、田中美知太郎他訳、中央公論社、1987

セルフ・ディベロップメント教育におけるマップ技法の適用、小林博和、武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要、2014